

さらに、もう一つ別のアイ・ラブ・パリ

ー フランス語の学び直し、その後 ー

松村 茂治

フランス語の学び直しを始めて二年が過ぎた。学び直し当初のことについては、三十三号に記したので、間もなく中級の教科書を終えようとする今、その後のことについて二、三記しておきたい。

シェークスピアより立て看板

この夏、朝日新聞の読書欄を広げていたら、気になる記事が目飛び込んで来た。「物語を忘れた外国語」（黒田龍之介・著）という書籍を紹介している読書欄のコーナーで、見出しには、「語学で鍛えた想像力が『教養』に」とある。書き手は、早稲田大学教授・都甲幸治氏である。

しく(?) サルトルとカミュの文章が掲載されている頁に出くわした。どちらも十行ほどの短いものだったが、『これが教科書でしょう!』との思いを抱きながら貪り読んだ。

この思いは、今になっても変わらない。このコラージュ教科書では私のイメージするフランス語学習は望めないとの思いが募るばかりで、それを補うべく、一年ほど前から同じ学校の別の講座を受講し始めたのだが、それについては項を改めて述べることにして、気になる記事に話を戻そう。新聞の読書欄で、都甲氏は以下のように述べている。

「・・・だが近年、語学教育における文学の講読は人気がない。シェークスピアなんて読んで役に立つの。そこで黒田は反論する。すぐに役立つことはすぐ古びるよ。むしろ一見役に立たないことのほうが大事さ。」

どうやら、「物語を忘れた外国語」には、私の疑問に対する何らかの示唆が載っているようである。そこで、早速入手して読んでみると、「はじめに」の部分に、示唆どころか、まさに「我が意を得たり!」の想いを強くする一文が出ていたのである。

私は、語学学校で使われている教科書の様変わりについて、本誌三十三号で以下のように指摘した。

「(受講の申込みに行つて) 手にしたカラー印刷A4版は、一言で言うと、教科書らしくないと言つたらいいのか、どのページも、雑誌のグラビアページのような作りなのである。しかも、ページによっては、あちこちから取つてきた記事が雑然と貼り付けられているようで、コラージュといったら少し大げさになるが、何とも統一感が無く、これを使つてどのような授業になるのか、イメージが湧いて来なかつたのである。(中略) そうした教科書で学び始めて数ヶ月経つたとき。この教科書には珍

「・・・欧州にはヨーロッパ言語共通参照枠(略称CEFR)というガイドラインがあつて、最近の語学教材はこの基準にしたがい、学習をはじめたばかりの者はA1、実務に対応できる者はB2というようにレベル分けがされている。(中略) CEFRにおける最高レベルはCで、C1は優れた言語運用能力を有する者、(中略) そういう人向けの教材もあるのだが、新聞の社説とか、小説の抜粋とか、そういったものを切り張りしただけの印象しかない。優れた言語能力がある人が、こんなものを読まなければならぬのか。(中略) 言語学がどれだけ物語から離れようとも、語学から文学への道を進んでいく学習者はこれからは異なるに違いない。検定試験漬けで、会話至上主義の空虚な外国語環境に潤いを与えてくれるのは、誰が何といおうと物語しかないのだと、私は堅く信じている」

(* 傍点は松村による)

なるほど、そういう仕組みになつていたのである。確かに、この二年間私が使つていた教科書にも、B1の表示がある。初歩ではないが実務には足りない・・・その通りである。実用性重視、向こうに行つても困らない役立つ内容重視というのも、よく分かる。聞くところによると、英語の学習

教材も同じような作りということだから、こうした傾向、つまり初学者・中級者・上級者といったクラス分けと（これはいいとして）、実用重視の教科書の構成は、フランス語に限ったことではなく、世界的なトレンドということになるのだろう。

教科書だけではなく、市販の参考書も同じような傾向にあるように思う。教科書がそういう方向なので、それを補う参考書としては仕方ないことではある。

時期はすこし遡るが、定年退職になる前、学び直しの準備に時々書店に寄って参考書を物色していたとき、手にした一冊を見て、時代が変わったということを実感したのだった。ほとんどの本に、CDが付いている（昔の英会話の参考書には、極たまにカセットテープが付いていたが、読解や作文の参考書にテープが付いてくることはなかった）、勉強がしやすくなったと思うと同時に、教科書で用いられている読解の題材に目を見張ったのだった。

手にしたのは、フランス語会話の本でも、パリの観光ガイドブックでもない。入門から、文法、会話、聞き取り、作文といった、フランス語を総合的に学習するためのシリーズの中の「読み」のための一冊である。その内容紹介に「パリの街は『読み物』でいっぱい。街にあるものを手当たり次第読みながら、『読み』のポイントを知識ではなく

感覚として提示していきます」とある。頁を追ってみると、確かに、巷でみかける看板やポスター、道路標示などが、そのまま教材となっている。

まさに、シェークスピアより立て看板である。その方が、すぐに役立つということなのだろう。確かに、自身の経験でも、伝統的な教科書に出てくるような文章は読めても、飲み屋のおすすめ料理の看板や道路標識、雑誌や新聞の見出しや記事などは、教科書の文章を読むような訳にはいかない。

今までに見たことのない参考書であり、私の弱点を補ってくれるに違いないとの思いで購入した。私のように、日本にいて外国の言葉を学ぼうとする者にとって、日常的な口語表現を理解するのは、なかなかやっかいなことである。ネイティブなら子どもでも知っているようなことでも、普通の教科書には載っていないから。

だから、こういう参考書が一冊くらいあってもとは思っている。しかし、語学教材全体がそうした方向を向いているとしたら、それは随分と偏った語学学習になるのではないか。先に記したように、この二年間、そうした流れの中で作られた教科書を使って学んできたので、実感を持ってそう思うのである。

巷に溢れる「読み物」を教材にした参考書を手にしたのとほぼ同じ時期に購入したもう一冊の本がある。「フランス語解釈法」（伊吹武彦編・白水社）という参考書で、何を考えてこの本を購入したのか、全く覚えていない。そのような買い方だから、当然、まだ読んではないが、かなり前から書架に入っている。そして、本文は読んでいないものの、「はしがき」の中の数行に鉛筆で下線が引いてあるところを見ると、この部分だけは読んだようだ。おそらく、何を言っているのかよく分からないという意味で引いた下線と思われるが、今こうして、二年間の中級の学習を終える時期になって見直すと、そこに書かれたことが、よく分かるのである。もう少し正確に言うと、コラージュ教科書で学んで来たおかげで、よく分かるということである。こういうのを反面教師というのだろう。

「フランス語を正しく読み、正しく理解し、必要に応じてこれを適切な日本語に移すためには―これはすべての外国語についていいうることであるが―単語の意味を正確に知り、文法の要点に通じ、フランス語特有の成句や構文を習得すべきこと無論である。しかし、最も大切なことは、原文の表現しようとする思想や感情を、できるかぎりの確に感得し把握する能力を養うところにある。

文法の知識も成句・単語の記憶も、思考内容の把握への修練と相伴なわなければ物の役に立つべくもないであろう。」

押しボタン式横断歩道の渡り方、公衆トイレの使用法、カフェのメニューの読み方、マーケットに並んでいる食材の読み方などを「読み」の教材として思いついた人たちは、「これこそ生きた教材！」と膝を叩いたのかもしれない。古典的な教科書しか知らない者の目には、確かにそれは新鮮な教材と映った。フランス旅行の強力な助っ人になるに違いないとも思った。しかし、分かってしまえばそれまでである。言うまでもないが、そこには思想も感情も不在だからだ。換言すれば、半世紀以上前の、サルトルやカミュの文章なら、何度でも読みたいと思うのである。大事なものは、実用ではなく思想や感情であり思考内容、それは、黒田氏の言う「物語」、都甲氏の言う「想像力」ということになるのだろう。

道路標識や立て看板、食材の表示や料理のレシピも文化の一端には違いない。そうした文章を読めるようになることも、我々外国語を学ぶ者にとっては、その国の文化に近づいたための一歩であることは確かだ。だからといって、それだけで文化が成り立っているわけではないということ

忘れてはいけない。

超遅読再び

先に記した通り、コラージュ教科書では、望むような勉強ができたのではないかとの思いから、一年半ほど続けた中級講座と並行して別の講座を受講することにした。

選んだのは、文学作品（小説）を教材に、文法や構文の大事などところを押さえながら、作品を読み解き、味わうことに主眼に置いている翻訳の授業である。開設時間は土曜日の夕方五時から七時。週休二日があつかり浸透している昨今である。毎日がウィークエンドのような身でも、毎週土曜日の午後には家を出なければならぬということに抵抗感がないわけではない。それに、冬ともなれば、この時間だと、学校に着く頃には辺りは真つ暗である。しかも、偶然のことながら、前日（金曜日）の午前中には、ずっと続けてきた中級講座の授業があり、二日続けて出かけなくてはならなくなってしまうのも億劫である。

しかしながら、この程度の悪条件は、この授業の魅力を減ずるものではないということが、始まってすぐに分かった。

はじめに取り組んだのは、百年ほど前の作家シャルル・

ルイ・フィリップの短編集「小さな町で」からの一篇「帰郷」。

古い時代の田舎町の出来事という内容に加え、プロの文筆家の凝つた言い回しというのだろうが、こちらは外国人読者ということもあり、微妙に的を外しながらの解説ということになった。

予習時間には事欠かないので、入念に調べて準備をしたつもりでも、授業中に指名されて訳す十行ほどの文章でさえ、単語の取り違えや時制の勘違いなど、ミスのないことはなかった。特に、自分では分かっている、易しいと思っているところでのミスが多かったように思う。分かっていると思っているのが改めて調べようと思わないからであり、これは、思い込みによるミスが頻発する日常生活と同じではないかと感じている。

指名され、訳し終えて先生から「大体良いと思います」と言われると「やった！」と思えるのだが、なかなかそうは言ってもらえず、重大な誤りを指摘されるのである。悔しい気持ちはあるが、誤りを指摘されないようなら、あえて授業を受ける必要はないと思うようにしている。

一文一文の構造を確認するようにして進む授業は、まさに遅読そのものだが、一度読んだだけでは、何を言っているのかさっぱり分からなかった文章について、主語・述語

目的語を探し出し、なぜ複数形なのか、なぜその時制になっているかを考え、代名詞が指しているものを前の文章の中に求め・・・と、まるでパズルを解くようにして読み進めていくと、霧の中から風景が浮かび上がって来るようにいつしか、文の意味が姿を現してくる・・・何度こんな経験をしたことだろう。

岩波文庫の「フランス短編傑作選」の解説には、作家について、「貧困、病氣、老年、死など暗い題材を扱いながらも、どこかとぼけたようなおかしみ、独特のユーモアがある。」とあった。授業で読んだ「帰郷」と「弟」はこの解説の通りだったように思うが、次に読む予定と言つて渡された「アリス」は、「弟」の続編のような作品だったが、時間がなくなつてしまい、授業では手つかずだった。この夏、少し時間ができたので読んでみると、滑稽なところがあったものの、ユーモアと言うより気が滅入るような話だった。

授業で読んだときには、易しいことを随分と回りくどく書く作家だと思ったが、「アリス」を読んでみて、文体に少し慣れたのだろういか、一年前に「帰郷」を読んだときに較べると、読みやすかったように感じた。それが、こちらに読解の実力がついた証しだったらいのだけれど。

辞書を引けば単語の意味は出ているわけで、文法などに

は多少目をつぶつても、当たらずといえども遠からず程度の理解は出来るのかもしれないが、それでは何とも気持ちが悪。ああでもない、こうでもないという薄皮を剥がしていくと、最後には、文法書の解説通り、仏文解釈法の例文通り、つまりルールに則った文章になっていることが確認できたのが面白かった。

囲碁の世界には、「定石は覚えて忘れる」という格言があるらしいが、これは文章を書くときにも当てはまるような気がする。文法を気にしながら書いていたら、きつとつまらない文にしかならないだろうが、自由奔放に書かれたような文章も、分析的に見てみると、きちんとルールに則っている、そんなことを学んだ授業だった。

次の学期で読んだのは、「あなたを探して」というタイトルで翻訳が出ている長編の初めの部分であった。

その冒頭の数頁は、中米で生まれたハリケーンについての描写なのだが、擬人化されて描かれているために、「それ」あるいは「彼」という代名詞がハリケーンを指していると理解出来たのは、同じ所を何度も読み返した後でのことだった。

用いられている単語も構文も見慣れないものが多く、日本語で読めば何と言うこともないのだろうが、学習中の外

国語とあって、持てる知識を総動員し（といっても、たいして持つてはいないのだけれど）、想像力をフル回転させないと理解出来ないような内容だった。

この授業も超遅読で、一日二時間の授業で進むのは二、三頁。換言すれば、全十回の授業を終えた所で、ようやく物語が始まる・・・といったような進行だった。

小説は、全体を読んで理解するのが正当とは思いますが、一文一文の構造を明らかにしながら読むことで、全体を読むのとは違った小説の楽しみ方があることを知った。換言すれば、こうして外国語の原文を精読することを通して、小説家がずいぶん細かい所に気を遣って話を組み立てているということを感じることが出来たということである。この経験は、日本の作家の小説を読むときにも参考になるのではなからうか。

一回の授業で進む分量がそれほど多くはないということ、予習に当たって、気持ちの上ではかなり楽だったといえる。二年ほど前の「異邦人」の授業（これは、翻訳の授業ではなく、文学の授業だったのだが）では、一日に二十頁も進むことになっていたので、予習では、頁数をこなすことにばかり気持ちが向いてしまい、作品を味わうまでには至らなかった。

がじつと見つめている話と、火山なのか爆弾なのかかわからないが、何か爆発（噴火）し、それから逃れるために地中に潜り込む者がいたり、大木にしがみついて耐えている男の太股を失禁した尿が流れたりするといった場面で、本文とは別に、朗読部分だけでも、登場人物は何者なのか、それまでに何があったのか、これからどうなっていくのかと、大いに気になるのだった。

ただし、授業を終えての感想は、作家はどうして中級者が見たこともないような用語と難しい言い回しを好むのだろうということである。今、この文章を書きながら、テキストを開いて見ているのだが、今見てもはじめて見るような感じが拭えない。

授業で読んだのは、この作品の導入部分で、本を裁断する巨大な装置の大体の仕組みと、主人公以外にも風変わりな人物が登場するらしいということが分かっただけで、中心部分となるべきと中盤以降がどのような展開になるのかについては、全く分かっていない。

そして、この講座を受講して間もなく一年になるうとしている現在読んでるのは、数年前に亡くなったロジェ・グルニエの短編集「別れるとき」からの一篇である。

この作家については、数年前に短い作品を読む機会があ

その次の授業で取り上げられたのは、「六時二十七分の電車に乗って、僕は本を読む」という、何とも妙なタイトルの小説だが、これも翻訳が出ていて、ネットで調べてみると、多くの人が高い評価していることが分かった。

売れ残って返品されてきた本を、リサイクルのために裁断する工場に勤める男が主人公で、裁断の際に飛び散ったと思われるさまざまな本の一頁にも満たない断片をかき集めて職場から持ち出し、通勤電車の中でそれを取り出して音読するという設定である。車中で読まれる本は、賞を取った小説の一節であったり、料理レシピであったり、歴史書であったりと、相互に何の関連もない。しかも、断片なので第一頁の一行目から始まるわけではなく、彼の朗読とフランス語に慣れている乗客でさえ、何の話が始まったのか、一瞬戸惑うことになるが、私たちは、それを外国の言葉で読むわけだから、二重三重の分かりにくさを味わうことになる。

一学期で読んだのは冒頭の二十頁ほど。車中朗読の目撃者という立場で言えば、二、三の作品の朗読に立ち会ったところで授業は終わってしまった。私たちが立ち会ったのは、いつの時代の、どこのことだか分からないのだが、誰かが（おそらく子どもの父親か？）、小屋の入り口に吊さされているウサギの皮を剥ぎ、内臓を取り出すのを、子ども

り、興味を感じて、原書、翻訳取り混ぜて数冊購入したが、まだほとんど読んでいない。

戦時中の話で、パリからフランス中部の田舎町に、行方不明になっている恋人を探しに行くという設定である。地下鉄や公共鉄道の駅名が出てくるので、その度に、地図を広げ路線を確認したり、乗換駅の周囲をインターネットを使って「散策」したりしている。フランスの戦争事情についてはよく知らないが、半世紀以上も前のことなので、鉄道も町の様子も随分と違っているのだろうと想像しながら予習・復習をしている。

今まで、この授業で読んできた他の作品にも当てはまることだが、ある一つの文が数行前の文と呼応していたり、一つの文が重層的な意味を持っていたりと、スルメを噛みしめるようにして進む読解は、まさに至福のひとつときである。また、先日は、作家の仕掛けた罠に見事にはまってしまったのではないかと思えることに授業中に気づき、作者は墓石の下で、にんまりしているのではないかと発言すると、先生は「言葉遊びの好きな作家もいるから、そういうこともあるかも・・・」と、否定はされなかった。

少々、嫌らしい説明になるかもしれないが、この一年、こんなことを学んできたのである。

主語は常に文のはじめにあるとは限らず、また、順序も主語↓述語の順になっているとは限らないこと。それどころか、文筆の専門家の文章でも、主語・述語が完備されていない場合があり、そのときには、言葉を補って考えなければならぬこと（もつとも、これは日本語の場合でも同じだが）。関係代名詞の先行詞が、ときにとんでもない遠い所にあり、また、一つ覚えの「ところの」という訳では理解出来ない場合のあること。過去形の地の文の中にいきなり「恒久的な真理」を言っている訳でもないのに、現在の文が出てきて面食らったりするが、決して作者が時制を間違えたわけではなく、それなりの意味があること。

「机」は男性名詞、「卓」は女性名詞といった具合に、名詞や代名詞に性があり、動詞に活用があるなどは、覚えるのには面倒くさいことこの上ないが、それが読み解く際の重要な手掛かりを与えてくれることなどである。

最近一番感心しているのは、複雑・難解で、一見しただけでは意味が分からないどころか、言葉のつながり具合が分からない、分かりやすく言えば、めちゃくちゃに見えるような文章も、プロの作家の文章は、きちんと法則に則って書かれているということである。

小説・我が国でフランス語を使うということ

食事をしたりして、フランスへの思いを高めてはきたけれど、僕はフランス語とは関係のない大学院に籍を置いていたので、フランスは憧れではあったけれど、修士論文やその後の就職のことを考えると、実際に行けるとは考えてはいなかった。

「たまたま、学校の帰りに二人になったとき、「一緒に行かない？」と言われ、どきまぎしたことは覚えている。彼女は大使館行きを誘ったのだが、ぼくはフランス行きと勘違いして、間の抜けた返答をしたのだった。

後になって思うと、大使館へ行こうという誘いは彼女からの「最後通牒」だったような気がする。あの日のことで覚えているのは、大使館の門を入ったところで、初めてフランス語を使ったということだけである。

現在通っている語学学校の廊下に、二〇一九年度の給費留学生募集のポスターが貼ってあり、出願期間は、六月二十五日～九月三十日とある。昔の選考も、今と同じような日程で組まれていたのではなかったらうか。大使館に向向いたのは夏の盛りの頃だったと記憶している。

都内の事情には明るくなく、本気で留学を考えていたわけでもないのに、大使館が都内のどの辺にあり、どういっ

何だか大上段に振りかぶったような話が続いてしまった。最後には、さらにややこしい話をしなければならぬので、ここらで気分転換を図っておきたい。

学び直しを始めて二年半ほど経ったところだが、これから先、日本にいてフランス語を使う機会は、どれほどあるのだろうかと思う。二年後に東京でオリンピックが開催されるが、選手や観光客の世話をするボランティアにでもならない限り、この言葉を使う機会はほとんどないだろう。

今まで、学校外でフランス語を使ったのは、本当に指折り数えるほどしかない。その際、ネイティブの先生に話を聞いてもらうというのは、対象にはならない。学校外でそうした機会があっても、それは授業の延長同然のことで、先生方はかなりの包容力を持って接してくれるからだ。

はじめのエピソードとして思い出すのは、昔、通っていた語学学校の同級生と、フランス政府給費留学生の募集について説明を聞くために（あるいは、書類をもらうためだったかもしれない）、フランス大使館まで行ったときのことである。

大使館に行こうと言いだしたのは、彼女の方だった。語学学校の行き帰りに、何人かの同級生と喫茶店に寄ったり

た交通手段を使って行くのがいいのか、積極的に調べた覚えはない。誘いを受けて地図くらい見たと思うけれど、今行けと言われたら、改めて調べないと行けない。

大使館のホームページ（当時は、このような便利なツールはなかった）を見て、大使館の住所が南麻布であること、最寄り駅は地下鉄の広尾駅らしいことは分かったが、当時も同じ場所にあったのだろうか。

今、この文章を書きながら、気になってグーグルマップで大使館周辺を見ていて、どうやら大使館は動いていないらしいことは分かったが、もしそうなら長いこと、つまり半世紀近く、大変な思い違いをしていたことに気づいた。

あの日、僕たちは、明治通りの方からではなく、裏手にあたる、青木坂に抜ける通りから大使館に向かっていたようだ。きっと、最寄り駅である地下鉄の広尾駅で待ち合わせたのだろう。

大使館を目指して歩いてきた僕たちは、入り口が開け放たれていたの、そこから中を覗き、奥の植え込み（と思っていたけれど、今写真を見るとちよっとした林になっている）の手前で、車の手入れをしていた大使館職員と思いき男性の姿を認めたのである。

「すみません！」と声を掛けながら、入っていくと、彼も、手を休めて僕らの方に向かって歩いてきて、「何の用事か？」と聞くので、「給費留学生のことです。事務所はどこでしょう？」と尋ねたのだった。はっきりと覚えているのは、「事務所は二時まで閉まっているので、それを過ぎたら来なさい」という返事があったことだ。

それが何時頃のことだったのか、はっきりしないが、フランスでは二時間も昼休みを取るのかと思つた覚えがあるので、十二時をいくらか過ぎた頃だったのだろう。

しばらく時間をつぶさなければならなくなって、どこかで昼食を取つたのだと思うけれど、近くにレストランなどあつたらうか。どこかの木陰にいたことは覚えているので、有栖川宮公園まで戻つたのかもしれない。

このように、大使館行きに関わるほとんどのことを忘れてしまつているのに、職員らしいこの男性とのやり取りのところだけは、白っぽい砂利を敷き詰められた庭がまぶしかったことともに、妙にはっきりと覚えている。

「事務所はどこでしょう？」「事務所は二時まで閉まっている」のやり取りが、学校外で通用した初めてのフランス語だつたということで、僕はいささか興奮し、舞い上がつていたのである。おかげで、彼女がどんな服装だつたかさえ、覚えていない。習っている外国語が学校外で通じ

るといふことは、それくらい興奮する出来事なのである。

ところで、何が大変な間違えだつたかというところ、稿を書いている今の今まで、車の手入れをしていた男性と言葉を交わした場所は、大使館の前庭くらいに思つていたのだが、地図をよく見ると、むしろそこは大使官邸の庭園兼駐車場にあたる所で、その庭園の奥に見える建物の向こう側が大使館の入り口になっているようだ。要するに僕たちは広い大使館の敷地の裏口から入つてきたことになる。

ストリートビューを見ると、大使館裏手の歩道に「青木坂」の表示があり、そのすぐ近くの堺に、そこがフランス大使館であることを示す表示と、一体何から身を守ろうとしているのか訝しく思えるような頑丈そうな鉄製の門扉が写っている。僕らがやって来たとき開け放たれていたのは、ここだつたと思うのだが、当時は、このような頑丈な門扉はなかったのではないだろうか。

写真を見る限り、今も、その中は車置きとして使われているようだから、男性が車をいじつていたという記憶は間違ひではないだろう。僕たちは、何のためらいもなく、そこからづかづかと中に入り、男性に近づいていったのだが、何とものどかな時代だつたと思う。相手はフランスである。今の時代に、万が一、鉄扉が開いていたとして、中をうかがつたり、許可なく足を踏み入れたらしたら、どうなつた

だろう。

「二時まで閉室」と教えてくれた男性は、「ただし、ここは大使館ではない。大使館の事務所は、林の向こうの建物、入り口は建物の反対側・・・」といった説明をしてくれたのだと思うが、「二時を過ぎたら来なさい」が分かつて気もそぞろになつてしまつたのか、その後のことは記憶にない。

その後、指定された時間に大使館事務室へ行って、用件を済ませることができたのか、どのようにして帰つたのか・・・間もなくして、僕は語学学校をやめて専門の勉強に取り組むことになり、同行の彼女が留学試験を受けたのか、フランスに行けたのか、全く分からない。

次のエピソードとして思い出すのは、大使館の一件からそれほど時間が経っていない・・・そう、一年か二年後のことである。

知り合い（正確に言うと、ぼくの友人の知り合い）が勤める会社では、気のあつた同士が年に何度か、美味しいもの・珍しいものを食べる会を催して、内輪の会ということと友人に声がかかり、その友人が僕を誘つてくれたのだった。

その日会場となつたのは、赤坂にあつた地中海料理がギ

リシヤ料理の店で、「タベルナ」という店名だつた。一度しか行つたことがないのに、半世紀近く経つた今でも名前を覚えているのは、食事をする所の名前が「タベルナ」だつたからで、はじめて聞いたときには、ずいぶんと洒落た名前をつけたものだと思つたのだが、ギリシヤ語の「タベルナ（音としては、タヴェルナに近いらしい）」は、英語の「Tavern」と同じような意味で、要するに「食堂」という一般名詞をそのまま固有名詞にしたということのようだ。

どんな料理を食べたかは全く覚えていないが、シヨウタムの時間があり、民族音楽に合わせて、数人のウェイターたちが肩を組んでギリシヤダンスを踊つてくれたのは覚えていて。ダンスに先だつて、客のテーブルには素焼きの小さな皿が配られ、客がそれを踊り手たちの足下に投げ入れて景気をつけるといふ趣向になつてた。当然、素焼きの皿は砕け散るわけで、踊つていた床の片隅には、皿の破片が山になつてた。

どういふ経緯で、ウェイターの一人と、フランス語で言葉交わすようになったのかは、覚えていない。気づいた時には、彼は（確か、オレステスと名乗つていたと思うが、実際にギリシヤにそういう名前があるのかどうか・・・）

ウェイターとしての仕事を中断して、どっかりと僕の向かいの椅子に座り、僕は彼の言うことを皆に「通訳」するという役目を負うことになった。もちろん、習い始めて二、三年のことなので、まともな通訳など出来るはずはないのだが、ワインの力を借りて、けっこう大胆になっていたようだ。

そんなことになったきっかけとして思いつくのは、当時、ジョルジュ・ムスタキ（作詞・作曲・歌）の「異国の人」というシャンソンが流行っていて、彼はエジプト出身ということだが、もともとはギリシャ系ということなので、何かのきっかけで、「ムスタキと同じですね!」「お前、ムスタキを知っているのか!!」といったやり取りがあったのかもしれない。

怪しげな通訳だし、どんなことが話されたのか、覚えていない・・・というより、早く忘れてしまいたいというのが本当のところなのだが、この話には意外な展開があった。「タベルナ」で食事をして、一、二週間ほど後のことである。

当時、僕は西武池袋線の豊島園駅の近くに下宿をしていた。通っていた大学は、池袋で地下鉄に乗り換えて二つ目の茗荷谷駅前にあった。電車は空いていたので、その日は午前中の授業はなく、昼近い西武線に乗って大学に向かっ

たのだと思う。途中の練馬駅か桜台駅から乗ってきて、向かいの座席に座った人がいた。読んでいた本から目を上げたとき目が合い、声を掛けてきたのだった。オレステスだった。

運悪く(?)隣の席が空いていたものだから、彼は親しいトモダチを見つけたかのように隣に移ってきて、いろいろと話しかけてくる。向こうは、僕はフランス語はできると思っているけれど、「タベルナ」ときとは違って、周囲は赤の他人ばかりなので、途中下車したくなかったほどのだが、少し落ち着いてくると、そんなにも分からないフランス語ではないということが分かってきた。

オレステスにとつてのフランス語は、外国語なので、ネイティブの発音より、ゆっくり、はっきりしていたのだと思う。こちらは、ウィとノン、それに知っている単語を付け加える程度の応答だったが、それなりに意思疎通はできていたのかもしれない。

池袋に着くまでの間に、大学に行くのは止めにすることになってしまったのは、オレステスが、友だちと動物園に行くので、一緒に行かないかと誘ってきたからだ。大学の方はどうしても受けないという授業ではなかった・・・というより、積極的にサボりたいという気分だったのだろう、あっさり動物園行きを承諾したのだった。

動物園の入り口で待っていたのは、二人の日本人の女の子、つまりオレステスのガールフレンドとその友人だった。友だちというと、当たり前のように同性の友だちを想定してしまいが、異性の友だちという場合もあることを再認識、いや新発見したのだった。もう一度ここで「途中下車」したくはなかったのだけれど、そのためのうまい口実が見つからなかった。オレステスのガールフレンドより、友だちの方が僕の好みで、それはそれで良かったのだけれど、この日だけのダブルデートで終わってしまった。

その後、豊島園には二年以上住んでいたが、西武線でも地下鉄でも、オレステスに会うことはなかった。それ以外のエピソードとしては、こんなことがあった。在籍していた大学院にフランスからの留学生が来たので、学校外でのフランス語を試す絶好の機会とばかり会話の練習を申し込んだのだが、すぐに相手の日本語が上達してしまい、フランス語を使うことが億劫になってしまった。その後、就職した大学に、ポルトポ政権下のカンボジアから逃れてきた留学生が在籍していた。その指導教官から「彼女に専門科目の補習をしてほしい。カンボジアの名家の出だからフランス語は堪能だ。君が適任だ」と言われ、

何度か、その機会を持ったが、彼女もすぐに日本語が上達し、僕はお払い箱になったのだった。

その次のエピソードは、最近のこと、学び直しのために語学学校に通う電車の中でのことである。

外国人と思われる初老の紳士が（外国人の年齢はよく分からないが、同年配・・・いや、私よりずっと若かったのかもしれない）、途中駅から乗って来ることには少し前から気づいていた。乗る位置を決めていると見えて、時どき同じ車輦に乗り合わせるようになった。もちろん、先方はこちらのことなど全く気づいてはいない。

私が橋本駅始発の電車を利用するのは、学校の近くまで座っていきからである。四、五十分ほどの乗車時間を、その日の授業の予習に充てようという算段なのだが、朝九時過ぎという電車にも拘わらず、途中から熟睡してしまうことがしばしばだった。

春学期が始まって間もなくのことだった。

学校で使っている大判の教科書は、車内で開くには邪魔になるので、コピーを取って持ち歩くことにしていた。その日手にしていたのも、朝、出がけに取ったコピーだった。橋本駅を出て数駅、目はフランス語を追っていたのだが、

いつの間にか眠ってしまい、肩を叩かれて目を覚ましたとき、前に立っていたのが件の紳士で、手から滑り落ちたコピートを拾ってくれたのだった。

そのときは、「落ちましたよ」「どうもありがとうございます。眠っていました」といった程度のやり取りで、このとき私は日本語で受け答えをしたので、先方も日本語で話しかけてきたのだと思う。

その後も、同じ車輛に乗り合わせることはあったが、こちらは週に一度の通学、先方も毎日定時に出勤ということではなさそうで、よく姿を見かけるといことではなかった。ただ、コピートの件以来、彼が乗って来る駅を過ぎると目で車内を探るのが習慣のようになっていた。

次に声を掛けられたのは、コピートのことがあってから二月ほど経っていたらうか。授業はまだ春学期だったように記憶している。電車が停止する前から、彼は私の隣の席が空いていることに気づいていたようで、ドアが開くや、空席目がけて一目散に近づいて来て、席を確保したのだった。

はじめ、隣に座っているのが私だとは気づいてはいないようだった。彼がフランス人だと言うことは知らなかったけれど、外国人の前でアルファベットの文章を広げるのは気が引けたので、コピートを折り畳もうとしたとき、「フランス語ですね」と話しかけられたのだった。このときはフ

ランス語だった。この前居眠りしていたのと同じ人物だと気づいたのだろう。私が手にしたのは、レッスンは進んでいたけれど、この前拾ってもらったのと同じ体裁のコピーだったから。

「その節は、ありがとうございます。フランス語の教科書です。横浜の語学学校に通っています。今日もこれから学校に行くところです」と、このときは、フランス語で返したのだった。「フランスの方ですか？日本語が上手でしたが」と尋ねると、「ええ、長いこと日本に住んでいます」という答えが返ってきた。

私が手にしていたコピートが教科書だと分かっていたようで、ひよつとすると彼は語学学校の先生だったのかもしれない。ただし、私が通っている学校のパンフレットには、この顔立ちの先生の写真は載っていない。

この日もたいした話はしないうち、間もなく彼は下車して行った。

その次会ったのは、秋学期もかなり終盤に近づいた頃だった。

私が立っていた近くのドアから乗り込んできたとき目があった、軽く会釈をしたのだった。この日は、橋本駅で発車間際の電車に駆け込んだので、座ることができなかった

のだった。すぐ横に立った彼に、「しばらくお会いしませんでした・・・」と声をかけると、「フランスに帰っていたので」とのことだった。

この日も長い話ではなかったけれど、要約すると、フランスに住んでいた母親が亡くなり、夏に帰国していたとのことだった。そして、日本には二十年以上いるけれど、ここで帰ることになるかもしれないと、ちよつとしんみりした様子だった。

亡くなったと言われても悲しいかな、「それはご愁傷さま・・・」といった気の利いたフランス語は出て来ない。それでも、両手を合わせて目をつぶると、こちらの気持ちは伝わったようだった。

その次会ったときに、やはりフランスに帰ることが本決まりになったと伝えられた。国に戻る嬉しさよりも、住み慣れた日本を去る寂しさが感じられた。「いつ日本を発つのですか」と尋ねると、「春になったら」ということだったので、そこが仕事の区切りなのだろうと思った。やはり学校の先生だろうか？「知り合いになれたのに残念ですね」と言うと、「本当に」と言ったあと、突然「あなたはどんな辞書を使っているのですか」と聞かれ、鞆の中から電子辞書を取り出したのだった。「本になっている辞書が好きなのですが、重いので・・・」というとき、「確かに。」

でも、こうしてフランス語を学んでいる人がいるのは嬉しいものですな」とにっこりしながら、「私の辞書を使ってくれませんか。荷物を整理しなければならぬので」ということになり、名刺を渡して別れたのだった。

そして、年が明け、冬学期もかなり進んだ三月初旬、重い宅配便が届いたのでした。机の上に、分厚い仏々辞典が乗るようになったのは、このような事情によるのである。厄介なのは（などというのは、罰当たりもはなはだしいのだが）重いので、書齋以外で見ることが難しいのと、仏々なので、一度引いたのでは、ほとんど意味は分からないことである。

要するに、我が国にいてフランス語を使ったのは、半世紀の内でも、以上のようなものなのだ。

さて、話を本題に戻そう。フランス語の学び直しをしていて気づいた教科書のこと、授業のことを述べて来たのだった。

「恐るべき子どもたち」を途中まで読む

ー 古典の権威は本当か？ー

ジャン・コクトーの「恐るべき子どもたち」を原語で読んでみようと思ったのは、二年ほど前、アルベール・カミ

ユの「異邦人」を原語で読んでみようと思つたのと全く同じ理由からで、最近になって(二〇一七年)、解説付きの対訳本が出たからである。細部は忘れてしまったが、一度読んだことがある小説で、それほど長い話ではないということも、「異邦人」のときと同じだった。しかも対訳本の著者・塩谷祐人氏が、私が定年まで勤務していた大学(学部は違うが)の出身者ということもあって、面識はないものの、親近感を持ったのも一因である。

対訳本は原文全体をカバーしてはいないが、手元に昔手に入れたフランス語の文庫本(紙は茶色く変色し、古本特有の臭いがする)があるので、割愛されている部分についてはそれを見ればいいし、訳については岩波文庫(鈴木力衛訳)があるので、それで補えると考えたのである。

対訳本で割愛されている部分についてのみ、岩波文庫に頼っていたら気づかなかつたのかもしれないが、二つの訳を対照するようにして読まざるを得ないこともあり、それがこの項を書くきっかけとなった。

文学作品なので、日本語への移し替えは、一様ではないであろうし、訳者によって受け止め方のニュアンスも微妙に異なってくるであろうことは、素人なりに想像はつく。しかしながら、原文を見ながら二つの訳を読み比べてみると、鈴木訳にニュアンスや解釈を超えて、困惑することが

な暗幕がつけられており、きつと画家たちが住んでいるに違いない。」(塩谷訳 九頁)

前段は、両訳とも変わらないと思うが、後段は明らかに違つていて、塩谷訳では、ブルーシートを想像することは無い。天窓の部分が、カーテンときのガラスになつていてと考えるのが自然と思うが、あるいは、外壁の屋根に近い部分に明かり取りの窓があり、そこにカーテンが掛かつているということかもしれない。ちなみに、問題となる部分のフランス語は〈sumonterへび、 「上に乗る、かぶる」という意味もあるが、「丸屋根を」頂く」という意味もある(他の意味もあるが、ここでは省く)。そして、原文には「屋根の上」に該当する言葉はない。もちろん、原文にないからと言って、言葉を補つてはいけないということではないのだが。

岩波文庫のそれに続く次の頁でも、理解に苦しむ訳に遭遇した。子どもたち(悪ガキたちと言うべきか)が活動の拠点にしているたまり場を称して「屈強の広場」の訳が与えられているのである。時代と共にいろいろな新語が生み出されることは知らなくはないが、「屈強の広場」とは、一体どんな広場なのだろう。プロレスの興行でも始めよう

頻発するのである。

たとえば、次の文章から、私たちはどのような情景をイメージしたらいいのだろうか。

「・・・そこは幾つもの小さなアトリエが、びっしり建ち並んだ家々の高い壁の下にかくれている。これらのアトリエには写真屋の持つているような、カーテンのついたガラスが屋根の上のついているが、そこにはきつと画家たちが住んでいるに違いない。」(鈴木訳 七頁)

作品の舞台となった、パリのシテ・モンティエの構造がよく分からないので、「アトリエが高い壁の下にかくれている」というのがどういう状況をいつているのかはつきりしないが、とりわけ後段の、「カーテンのついたガラスが屋根の上のついている」がイメージできない。屋根の上に乗っているとされると、災害時にお馴染みのブルーシートを想像してしまうがそれでいいのだろうか。同じ所が、塩谷訳では、以下のようになっている。

「・・・家々が寄り集まつてできた高く平坦な壁の下に、こぢんまりとした私邸が隠れている。これらの邸の上の部分はガラス張りになつていて、写真屋にあるよう

というのだろうか。当該のフランス語に関して、手元の仏和辞典には「(強盗などが出没する)危険な場所、伏魔殿、賭博場」とある。残念ながら、対訳本では割愛されていて、確認が出来ないので、岩波文庫以外の全文訳を手に入れないならばならぬと考えた。

さらに、「屈強の広場」の数頁後で、主人公が友人(ダルジュロス)を探している場面について、以下のような記述がある。なお、引用中の()は、松村による。

「彼(主人公)は、ダルジュロスを探していた。ダルジュロスが好きだったのである。・・・ダルジュロスは学校の雄鶏であった。彼は自分に挑戦する者にも、味方につく者にも等しく好意をいだいた。」(鈴木訳 十三頁)

ダルジュロスの名前が出てくるのはこれが二回目で、これに先立つ所では、二頁ほど前に「ダルジュロスに会ったかい?」の一言があるだけである。だから、はじめ私は、ダルジュロスというのは人間ではなく学校で飼っている鶏のことだったのかと思つたほどである。しかし、先を読めば、ダルジュロスがれつきとした人間であることがわかつてくる。だとすると、「雄鶏」とは何なのか。人間とは別に、ダルジュロスと名づけられた鶏がいるということなの

かとも考えたが、何のことはない。『雄鶏』の他に「伊達男」の意味があるではないか。鈴木が訳した一九五〇年代の辞書には、この訳は載ってはいなかったということのだろうか？

それに続くところでも、不自然な感じのところがある。

「……生徒（主人公）は、ダルジュロスの巻き毛と傷ついた膝と怪しげな道具でふくらんだ上衣のポケットの前に出ると、いつも途方にくれてしまうのであった。」（鈴木訳 十三頁）

「ポケットの前に出ると」という表現は、普通の日本語にあるだろうか。「上衣のポケットが膨らんでいるのを目の前にすると」あたりが、自然な日本語のように思えるのである。

有難いことに、最近になって（と言っても、初版は二〇〇七年だが）光文社古典新訳文庫の一冊として、中条省平、中条志穂訳の「恐るべき子どもたち」が出たので、それを手に入れ、四冊を開いて読み進めることにした。困ったときには多数決で決めようというわけではないが、一つの翻訳だけでは危ないと思いつめたのである。

ではない。そのようにして読むことによって、疑問は氷解するかというと、却ってますます広がり、深まっていくからである。

たとえば、鈴木訳と中条訳で、全く反対の訳をしているところに出くわしたのである。

主人公の病が長引き、危険な状態に陥っていて、自宅療養を強いられるところの描写である。

「……看護婦のマリエットは、親身になって病人の世話をした。医者はすっかり腹をたてていた。彼は安静と休養と栄養が大切だと主張した。毎日やってきてはあれこれ命令を下し、必要な金を渡し命令通り実行されたかを確かめてから帰って行くのであった。」（鈴木訳 五十頁）

「……看護婦のマリエットは誠心誠意仕事に励んだ。医者は腹を立てていた。安静第一、気分を楽にして、十分な栄養をとらなければならないのだ。医者は往診し、あれこれ命令し、必要な金額をあたえ、命令が守られたか確認するためにまたやって来た。」（中条訳 八十九頁）

確かに、セカンド・オピニオンを得ることは、有意義なことではあった。たとえば、雪合戦をしていて、雪の球が口に当たった少年が意識を失うという場面がある。

「少年は地べたに横たわっていた。口から迸り出る血が顎から首へ流れ、雪を朱に染めた。……何人かの野次馬が少年のまわりにひしめき合い、助けようともせず、赤い泥をじっと見つめていた。」（鈴木訳 十四頁）

雪明かりの晩のことである。血で染まった土が赤く見えただろうかと、素朴な疑問を持つ。いや、それよりも、口から血を流している少年を取り囲んでいる人たちが、なぜ少年ではなく地面の方に目を遣るのかという疑問の方が大きい。原文に当たってみると、野次馬が見つめていたのは、*「La bouche (口) rouge (赤い)とあり、中条訳では、「血だらけの口」となっている。どういいう経緯で、口が泥になったのか。ちなみに、先ほどの「雄鶏」は、中条訳では「花形」となっている。*

今、有難いことに、と言ってしまったが、四冊を見開いて読み進めるということは、かなり面倒な作業でもあるということも言っておかなければならない。時間的な問題だ

中編小説とはいえ、長い物語のなかの一言なので、重箱の隅をつついて誤りを探し出すことはないだろうという考えもあるかもしれないが、「帰って行く」と「またやって来た」では、動きは全く逆で、これらを教材にフランス語を学ぼうという者にとっては、看過できない重要問題なのである。原文に当たってみると、ここは、*「event」*の過去形になっていて、直訳すれば「再びやって来た・戻って来た」という意味になる。「家に帰る」と言いたいのなら、*「return」*が普通ではないか……

今引用した部分に関しては、両訳とも、「医者は腹をたてていた」としているところも気になるのである。確かに、原文を見ると、「腹をたてていた」に該当する単語があるだけで、誰に対してかは明示されていないので、そう訳す以外にないのかもしれないが、それだと、文のつながり具合から言って、誠心誠意仕事に励んでいた看護婦に対して、医者が腹を立てていたように読めてしまうが、それでいいのだろうか。医者の立腹は、医者を含め皆が一生懸命努力しているのにも拘わらず病状が好転しないことに対して、医者が「自分自身に腹を立てている、いらついている」という風に理解したいと思うのだが、この疑問については両訳とも、何のヒントも与えてくれない。このようなところに疑問を感じるのは、私の日本語読解力の問題があるから

なのだろうか。

もう一つ、両訳で解釈が異なっている極めつけとでも言うべき例をあげよう。先の「赤い泥」の一頁ほど後、雪の球が口に当たって意思を失っていた少年に対する、学校関係者の対応について書かれたところである。

「・・・負傷者は小使部屋に運び込まれた（負傷者がでたということ、少年たちが通う学校から、教師と用務員が駆けつけ、少年を用務員室に運んだのである）。小使の細君は気のいい女で、少年のからだを洗ってやり、家に帰らせようとした。」（鈴木訳 十六頁）

「家に帰らせようとした」とあるが、この時点で少年の意識はまだ戻っていないのだから、帰らせるのはかなり無理な話なのである。その後しばらくの間、一緒に雪合戦をしていた少年たちに対する事情聴取（？）があり、その最中に、「・・・ほら、奴さん、目を開けましたよ」とあり、意識が戻るのである。「帰らせようとした」だけで、まだ「帰らせてはいない」という理屈が成り立つのかもしれないが、ここも、原文に当たってみると、*«venir a lui»*とあり、直訳すれば「彼（自身）に戻る」ということになる。

うか。つまり、家に帰るのではなく、気を失っていた少年の意識が戻るということである。このところ、中条訳では、次のようになっている。

「負傷した生徒を用務員室に運び、そこで人の良い用務員の妻が生徒の体を洗ってやり、目を覚ませようとした。」（中条訳 三七頁）

たった三分の一ほど読み進んだだけで、鈴木訳に、以上の通り何カ所もの疑問点、他訳との食い違いを見出すことになった。ここに取り出した以外にも、日本語として意味が良く通らない所、校正が不十分ということなのか言葉の重複するところなど、いくつもの気になるところがある。

本項の見出しを、「途中で読む」とした理由がお分かりいただけただろうか。決して長編小説というのではないが、読み切れていないのである。自分の読解力のなさを棚に上げていうことになるが、原文理解のためにと手元に置いた翻訳が信用できなかったことが最大の理由である。

私にもう少しフランス語の力があれば、全文を読み、全ての疑問点をきちんと整理して問いただすところだが、残念ながら、それだけの力はない。

私のような非専門家が、フランス語の勉強の一助にと読んでいて気づくようなことから、専門家が気づいていない訳がない。半世紀以上も前の訳なので、訳者なし出版社に対し、すでにある種のアクションが起こされているのかもしれない。もしそうだとすれば、長いこと、古典の權威として、世の中に君臨し続けてきたのは何故だろう。あるいは、この世界では、先人の訳業に対しては余計なこと

は言わないという不文律でもあるのだろうか。大学の先生の翻訳というについて、冒頭で引用した「物語を忘れた外国語」に興味深い記述がある。著者の黒田氏がおそらく学生時代に経験したことに基づいて書かれていると思うのだが、こんな一節である。

「外国語学習は長編小説に限る。・・・（しかし、大学の）授業では短編を精読するのが一般的だ。これは仕方がない。限られた時間内で長編は無理である・・・昔の大学では信じがたいことに、先生が翌年に物語の続きを読むことが珍しくなかった。学生は途中から『原書講読（七）』のような授業を受講することになる。・・・しかも、先生は、ある所まで読むと残りは自分で訳出して、数年後には邦訳が書店に並び、そのうえ授業中に難しく

る。」（十九頁）

*（七）はおそらく、同じ本を読み始めて七年目という意味だと思われる。

私が気になったのは、はじめてその授業を履修する学生が、物語の途中から読まされるということもさることながら、「授業中に難しく分らなかった箇所はちやっかり削除してあったりする」の所である。専門家でも分からないことがあるということはある得るだろう。しかし、そこはなかったことにしてしまうのは許されることだろうか。グローバル化の時代である、分らないところはいくらでも近くにいるネイティブに確かめれば済むことではないか。

翻訳にあたっては、言葉を補うこともあるわけだから、削除もありうるか・・・と考えてもみるが、ちよつと意味が違ふように思う。

ひよつとすると、「先生」は、分からないところを削除するだけでなく、学生が訳したところを、よく確かめもせず、自分の訳としてしまうこともあるのではないか。学生さんには申し訳ないが、そうとでも考えなければ、世に出回っている不自然な日本語訳の説明がつきにくいのである。繰り返しになるが、ここに書き出したのは、全体の三分の一ほどまで読んで気づいたことである。全部を読んだら、

そして、私のような素人ではなく、フランス語の専門家が読んだら、どれほどの疑問点を見つけたことになるのだろうかと思う。いや、専門家はすでに気づいているはずである。それにも拘わらず、誰も何も言っていないとしたら、これは誰の問題といたらいいのであろう。

ことのついでに申し上げれば、件の「岩波文庫」には翻訳という側面だけではなく、日本語の文章として、首をかしげざるを得ないところが散見されることも指摘しておこう。

一流の専門家の訳業をして一流の出版社の仕事に対して、素人が何を言うか！と言われそうだが、逆に素人だからこそ言えるのではないかと考えたのである。「〇〇先生の訳には、誤訳が多い」といった話は、専門家の間ではしばしば出ているのではないか。専門家はそれでもいいだろう、自分たちは正解が分かっているのだから。しかし、出版物を頼りに学んでいる者は、それではたまらない。

若い頃、「岩波」を古典の権威としてありがたく受け止め、意味の分からないところは、こちらの理解力不足と自らを責めたであろうことが哀れに思えてくるのである

(丁)

参考文献

- 黒田龍之介 「物語を忘れた外国語」 新潮社 二〇一八年
伊吹武彦編 「フランス語解釈法」 白水社 二〇〇六年
田島宏編 「コレクションフランス語 ⑤読む」 白水社 二〇〇三年
山田稔 訳編 「フランス短編傑作選」 岩波書店 一九九一年
塩谷祐人 「フランス語で読む『恐るべき子どもたち』」 白水社 二〇一七年
鈴木力衛訳 「恐るべき子どもたち」 岩波書店 一九五七年
中条省平・中条志穂訳 「恐るべき子どもたち」 光文社 二〇〇七年
Jean Cocteau Les enfants terribles Bernard Grasset 1925